

日本におけるロシア研究の黎明期

神原文庫にみる明治時代のロシア語辞書

経済学部教授

山 田 勇

我が国とロシアの人達は、お互いをどのようにして知り染めていったのであろうか。表題のテーマを与えられて先ず思い浮かんだのは、このようなことであった。手許の文献では、日本人の名前がロシアの大地に記録とともに初めて残されたのは、16世紀末であると言う。隠れキリシタンであった彼ニコラスはローマのキリスト教を信仰していたが、彼地で国教として信仰されていたビザンチンのギリシャ正教信徒から異教徒と看做されモスクワで殉教したというが、定かなことは判然としない。むしろ自らの意思に反してロシアの地を訪れるところとなり歴史の頁を飾ることになったのが、日本人漂流民の記録である。郷里の各港から大坂、江戸、蝦夷地をめざして出港するものの、季節風にあおられて漂流を始めると、その約三分の一の幸せな旅人は千島列島、カムチャッカ半島、さらにアリューシャンなどに招かざる客人として足跡をしるすことになる。

ロシア人の場合はどうか。17世紀末にはコサックがカムチャッカ半島から千島列島沿いに南下し、ラッコなどの毛皮を狙ってやって来ては日本に交易を求めるのだが、当時の幕府による鎖国政策の厚い壁に阻まれてか、また言葉の壁に阻まれてか、日本人の場合のようにロシアの漂流民の記録についての細かい記録が残されていない。このような自然発生的な両国民の遭遇は、1792（寛政4）年にアダム・ラクスマンが上述の漂流民、伊勢の大黒屋光太夫らを根室に送り届け、通商を求めるという事態により、両国双方の思惑による厳しい、そしてまた永い闘ぎ合いのドラマの幕が上がることになる。ロシアは、意外なことに、我が国が地政学的にみて重要である

という情報をアラブ人の執筆になる東洋に関する地誌から吸収したという。またオランダの地図学者メルカトールの文献が帝政ロシアの役人たちの目に留まり、日本の存在を確認したのであろう。

話を我が漂流民に戻そう。天の采配の僥倖を得られて彼地に招かれても、大半の者は異郷の地で寂しく息をひきとることとなる。望郷の歌がロシア民謡に歌い継がれることもあった。ロシアは将来両国の掛け橋となって活躍できる自国民の人材を養成するべく、彼らにロシア語教育を施し、日本語の教師としてペテルブルグやイルクーツクで教育に携わらせた。語学教育には文法書や辞書が必要であるから、様々な教材が作成された。漂流民達の出身地は全国に分布して、ロシア語教育を受ける際にも、また教材を編集する場合にも、自らの出自が顔を覗かせた。これらの教材を一瞥すれば、当時のロシア語の発音は元より日本語方言との貴重な対照言語学的な素材を巧まずして提供することになった。見事な日露のコラボレーションというほかはない。260年以上も昔にこうして生まれた露日語彙集や会話書、文法書がきちんとロシアに保管されていたのだから。彼らのなみなみならぬ深い関心が読み取れる。

そのような一人、薩摩の出身ゴンザを紹介しよう。彼は享保13年（1728年）に「航海の見習い」のため楫取りの父親と乗船し、藩の米などを積んで大坂に向け薩摩を出る。当時、数えて11歳。嵐に遭いカムチャッカ半島に漂着、奇跡的に助かりペテルブルグで女帝アンナ・ヨアノブナに拜謁。女帝は5年余りの間に覚えたロシア語をたくみにこなす彼の語学の才を高く評価し、日本語教師に任命する。

彼は元文元年（1736年）に辞典編集を開始し、元文4年（1739年）21歳の若さで没するまで、生きいそぐかの如くに『項目別露日単語集』（1736年）、『日本語会話入門』（1736年）、『新スラヴ・日本語辞典』（1736～38年）、『簡略日本文法』（1738年）、『友好会話手本集』（1739年）『オルビス・ピクトゥス（世界図絵）』（1739年）などを翻訳、執筆した。国語学者の金田一春彦は「ゴンザが作ったのは、ロシア語・鹿児島弁辞典というべきものだ。」と評価し、作家の井上靖も「ゴンザ自身、あふれんばかりの語学の才能をもっていたのだらうし、彼の生まれ育った薩摩の教育水準の高かったこともうかがわせる。と同時に、ペテルブルグで彼の指導にあたった司書ボグダーノフの父親のような愛情の賜物でもあったらう。本辞典は、日露交渉史上の輝ける一ページである」と評している。

ボグダーノフがゴンザから直接聴取した記録に「サツマのクニから出港した」と記されているものの、出身地も出航地も分かっていない。彼は多くの謎に包まれているため、これらの謎を解くロマンもふくらむ。

先に紹介した光太夫のロシア語は文字と単語のレベルにとどまっていたのに対し、ロシア人の直接の教授下で彼の齎した言葉の知的財産を「文法」と「文章」のレベルまでに一気にひきあげたのが、蘭通詞にして蘭学者の馬場佐十郎である。馬場は幕府天文方地図御用を勤めオランダ語、フランス語、英語を学んだ。江戸においてオランダ語文法を教授、著作し、かつ翻訳にもたずさわり、蘭学史に多大な貢献をなした。文化5年冬以来馬場は光太夫からロシア語の伝授を受けていたが、その内容はあまり高度のものでなかったらしく、光太夫が聞き覚えた単語の解説が主だったようであり、とても原文の翻訳には役立たないことがやがて判明する。

ラクスマンが来てから十年余りした後、第二の使節レザーノフが現れるが、この時も仙台の漂流民の津太夫ほか3名を長崎に送り返してきた。しかし時代はすでに19世紀に移って、ヨーロッパ各国が世界の航路開発に躍起になった大航海時代の時期であり、幕府は時の流れを察知してか、漂流民は引き取られる

が、アレクサンドル1世の親書や贈りものは一切受けつけないという対応に終始したため、ロシアとの関係が一気に悪化、樺太南部で生じたロシア人による焼き討ち事件に対抗する形で、文化8年6月4日（露暦1811年7月11日）南部千島の測量にあっていたディアーナ号の艦長ゴロヴニンら8名がクナシリにおいて松前奉行支配調役奈佐政辰によって捕えられ、足かけ3年函館に監禁された。彼が、ロシアへ戻ってから著わした『日本幽囚記』（1816年刊）は実にきめ細かな記録で、人質という異常な環境におかれながら衣食住のこと、公私ともに交わりをもった日本人のことなどを、驚くほど冷静に見つめている。

『日本幽囚実記』

[210,598]



ゴロヴニン艦長

文法用語対照表				
文法範疇名	書名 出版年	ゴロヴニン・ 馬場文法規範 1813	文部省露和字彙 初版 1887	八杉・木村 ロシア文法 1953
			実名辞	実名詞
		転格	格	格
		主格 / 一格	名格	主格
ρ		生格 / 二格	生格	生格
		役格 / 四格	役格	対格
		転移	変化	変化
		種類	性	性
		陽種	男性	男性
		陰種	女性	女性
		中種	中性	中性
		普通種	普通性	総性
		働辞 / 動詞	動辞 / 動詞	動詞
		運用 (法)	動詞 / 変化	変化
		爾我彼 / 三名	—	人称
		布置法	法	法
		不定法 / 無限法	不定法	不定法

ドイツの詩人ハイネは1825年に友人へあてた手紙のなかで、日本人のことを知りたかったらゴロヴニンの『日本幽囚記』(岩波文庫 赤 - 1075 - 1077, 上, 下)を読むよう薦めているほどである。馬場はその人質ゴロヴニンのところへ、ロシア語を習得するために派遣された。そして翌年の1813(文化10)年に、ゴロヴニンの協力日本で最初のロシア語文法書である『魯語文法規範』全六巻を著わし、ディルジャーヴィンやロシア語の近代化にも功績のあったロモノーソフなどのロシアの詩が紹介されているこの文法書を翻訳、我が国民に紹介している。

こうして、ゴロヴニンによって日本に「ロモノーソフ文法」の枠組みが直接伝えられ、しかも成熟しつつあった蘭学の器に移し入れられたことは画期的なことであった。馬場によってわが国の初期のロシア語学は研究上の初動時間をはるかに短縮することが可能になったのである。彼が本書で案出した文法用語はその後に引き継がれてゆくことになる。文法学の発達によって動詞にかかわる用語等では直線的に後世へと続くわけではないが、大勢としての傾向は彼の用いた術語がほぼ変

わりなく継承されている。むしろこれらの淵源は『文法規範』翻訳時に馬場によって導入された蘭文法の用語にあるが、ロシア文法独特の用語についてはロシア語術語の原語そのものから訳出されなければならなかった。ロシア語の文法用語の変遷を跡付けるために、上に、神原文庫に収められている文部省『露和字彙』初版を、ゴロヴニン・馬場文法規範及び現代の八杉・木村ロシア文法と比較したものを紹介する。

馬場が活躍していた文化・文政期、すなわち19世紀の初頭、1820年前後の時期は蘭学史上では一つの転換期と考えられる。蘭学がこれまでの実用主義的観点からしだいに広い意味での軍事的意味を帯び、技術の追求という転換が重視され始めた。我が国とロシアの付き合いも、馬場の蘭学に裏打ちされたロシア語吸収の過程とともに直接原語を介しての交流が可能となり、その道具としての露和辞典も西欧風の科学的な手法で編纂されるようになっていく。

わが国のロシア語研究の歩みをかなりよく示す指標として辞書編纂の歴史があるが、ロ

シア語に関する限り、江戸期のこの方面の蓄積は主に漂流民による語彙集が典型であるように思える。見出し語についてみると、多くはおよそ千語の域をそれほど多く出る事が少なかったといえる。時代区分としては、識者によっては維新前後期を独立させるという見方も出来るのだが、ここでは神原文庫に所集されている以下の明治期を代表すると思われる4冊について紹介しよう。

『魯學入門・魯語柱礎』 [880]

維新直後に、泉州の大島良一が『魯學入門・魯語柱礎』(1872[明治5]年)を翻訳している。装丁は和綴じである。ロシア語がどのような言語かということを知るための入門書としては最適であるが、原本は不詳である。先ずロシア文字を考案したギリシャ人宣教師の名に由来するキリル文字を片仮名による振り仮名つきで表示し、更に同様な手法で筆記体をあげている。



最後に数字や四季の名称など日常生活に最小限必要と思われる語彙を約150語ほどあげている。ロシア語見出し部分は横書きで、日本語部分は縦書きという当時としては標準的な表示形式をとる。何れの部分にもルビが振られていて、使い勝手を重んじた作りである。時を同じくして、緒方推孝が類似の『魯語湊』(1873)を出しているようであるが、神原文庫には収められていない。ロシアの文豪レー



ルモントフは『現代の英雄』で序文の如何なるものであるかを論じている。そこでここでもその故事にならって本書の序文を紐解いてみる。

『魯語柱礎』序

皇國西洋諸學之開也可謂盛矣然而英佛日蘭為之最焉 我朝之於魯西垂距離境僅隔一洋耳豈得開其學而不盛之乎哉余頃日著魯語柱礎冀四方君子幸開旋開旋余此冊子を編す。客有り難して曰く。子何此ノ迂闊の學を開くや夫れ鄂羅は地曠芒に位し隨て人智の發明技の精巧歐州諸國に及ばざる遠しと。余曰否否。夫れ學の盛衰は國の盛衰に關す往昔希臘羅甸の盛んなる其學四方に蔓延す爾餘英佛の盛んなるに及び其學勢希臘羅甸を凌轡するに至る是レを以て徴するときは學は國の盛衰に拘る明けし近事鄂羅の強大なる三大州に浸透す故に學の開運亦た日を計す可きなり客唯唯して退く

明治四辛未年秋八月日

泉州 大島良一識(印)

編者は序文で、「我が国では英、仏、日、蘭學が隆盛をきわめており、このような時勢に、ロシアに関する書物を刊行することの意義をいぶかしがるむきもあるが、西洋では、英・仏學以前には、ギリシャ・ラテン學が珍重された。斯學の盛衰は当該國のそれと緊密に符合する。折りしもロシアは3大陸にまたがる大国なのだから、本書の刊行の意義も大きいものがある。」と、ロシア學の研究の必要性を

簡潔に述べている。日露両国民双方がお互いに幾多の歴史の荒波の洗礼を潜りぬけて世紀を跨いだ今日、なおその意義の深さは失われず、ますます輝いてみえるかの如くである。これとほぼ、時を同じくして、山本某によって『魯西亜単語篇』長崎県晩成舎（1871〔明治4〕年）が石版で刊行されたという記録があるが、神原文庫には見えない。

『露和字彙』 [883]

文部省は明治初期に時局の切迫を認識し、最初、露和辞典を企画していたが、1887（明治10）年に東京外国語学校露語科に露和辞典の編集を委嘱した。1884（明治17）年最終段階に入った時点で文部省編輯局に移管、1887（明治20）年の1月に「露和字彙」が発刊となった。B5判上下2巻、本編だけで2749頁、収録語数11万余語をおさめる。活字印刷されたものとしては本邦初の本格的辞書である。



本辞典の編集には、市川文吉、古川常一郎、他3名があたったが、中に東京外語の教官も参加している。ロシア帝室アカデミー第2部会編纂の『教会スラブ・ロシア語辞典』（第2版、1868）を参考にしたようだが、明らかではない。末尾の「地名集」、「略語集」、「露国官位表」、「露国度量衡」は、フィリップ・レイフ編『露仏独英・新対照辞典』（増訂第4版、1873）のものと同じ。例文は少なく、日本語表記に苦心している。さらに巻末には「正誤

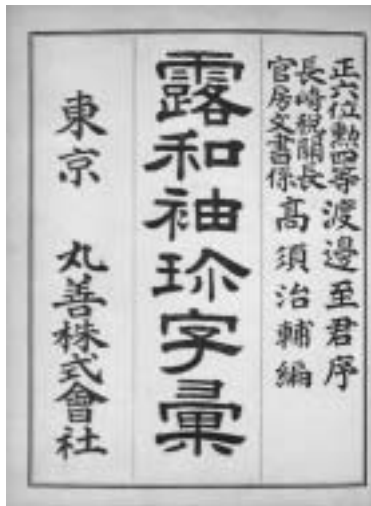
之部」があり、アクセントや綴りの訂正、訳語の改訂が記されている。伝えられるところでは、ロシア皇太子ニコライの訪日の折に本辞典が献上され、また世に好感を持って迎えられたので、十分需要を満たすには至らなかった。



ロシア語の辞書には欠かせない、動詞の体の区別や変化形も示されている。初版では現在の「完了体」は「完結趣意（動詞ノ）」と表示されているが、改定版で「完成体」に統一されている。初版では見出し語は横書きに、また語義を表示する部分は『魯學入門・魯語柱礎』と同様に縦組であるが、日露戦争の前年の1903（明治36）年に出された増訂版ではすべて横組みに改められた。増訂版といえ、見出し語はそのまま、説明がよりきめ細かく記述され、時代に合わない語彙を減じて一巻本にまとめられた。残念なことにこの増訂版は神原文庫にはない。

『露和袖珍字彙』 [883]

本格的な露和辞典『露和字彙』が机上版を目指したとするなら、ハンディーですぐ取り出せる辞書が高須治輔の手になる『露和袖珍字彙』（1896、丸善）である。A6判で525頁、約25,000語を含む。2段組みで見出し語に力点（アクセント）は振られていない。見出し語直後にロシア語の縮約形で品詞が示される。例文や熟語が記載されていないので、足りない部分はじっくり『露和字彙』を参照するこ



とになる。明治の終わりまでに6版を重ねたというのであるから、このような傾向は当時の人々がロシアに対して少しずつ心を開き始めてきたという世相を感じさせる。編者は明治10年代にプーシキンの『大尉の娘』を紹介した人物であることも一因かもしれない。

「露和袖珍字彙序」には次のようにある。

露和袖珍字彙序

夫泰西學入我國也久矣而其活用英為最獨
 仏亜焉而蘭雖為之濫觴，其流派殆將涸焉
 豈知非時勢所然哉自今將大行者露學也矣
 世間未聞有露字書譯者頃高須君有本書編
 纂舉一日來請予序余以不敏辭之不可固強
 再三則以余所聞聊塞其責焉曰我瓊浦西岸
 有一小村名稻佐往昔露艦入浦始登此地爾
 來十數年艦中用度概取於此是以露人得便
 多村人得利亦不勦故婦女童幼皆善解露語
 殆有彼唱我和之快豈不奇乎故彼則因得便
 親我我則以得利愛彼是豈非以所言語相通
 而何哉若夫人々相對而言語不通則聾啞耳
 木偶耳惡得便與利如斯乎夫露北隣大國也
 國躰政治不可不研究文物工藝不可不知悉
 而言語一端如稻佐村人者世間有幾人斯書
 也志斯學者為津梁必矣蓋到極其奧者在悅
 繹之深淺而已

于時明治二十九年六月

正六位勲四等 渡邊至

「それ泰西（ヨーロッパ）の学わが国に入ること久しくして其の活用は英を最とし、独、仏は亜なり。而して蘭は之を濫觴とすといえども其の流派は殆ど將に涸れなんとす。あに時勢の所然に非ずと知らんや。今より大きに行うものは露学なり。世間未だ露の字書の訳

あることを聞かざる頃、高津君本書編纂の挙ありて、一日余の序を請に來たり。」とあるではないか。ロシア語を学習したいという気持ちの少ない学生を相手にして、汗する日々をおくる身には何とありがたいお言葉か。ついで乍ら、ここは、じっくりお説を伺うとしよう。「余、不敏を以て之を辞して可（ゆる）されず。固く強く再三にわたれば則ち余の所聞を以て其の責を聊（はた）す。曰わく、我が瓊浦西岸に一小村あり、名は稻佐という。往昔、露艦浦に入り始めて此の地に登り、爾來十數年艦中の用度を概して此に取る。是を以て露人便を得ること多く、村人利を得ること少なからず。故に婦女童幼皆善く露語を解す。殆ど彼唱え我和するの快有り。あに奇しからずや。故に彼則ち便を得ることに因りて我に親しみ、我則ち利を得ることに因りて彼を愛す。是あに言語相通に非ずんば何（い）かん。若し夫（それ）人々相對して言語通ぜざれば則ち聾啞なり。木偶なり。いかに便と利とを得ること斯の如きや。それ露は北隣の大国なり。国体、政治研究せざる可からず。文物、工藝知悉せざる可からず。而して言語の一端の稻佐村の人の如きは世間に幾人有らんや。斯書、斯学に志す者は津梁と為すこと必ずなり。蓋し其の奥を極むるに至る者は悦繹の深淺に在るのみ。

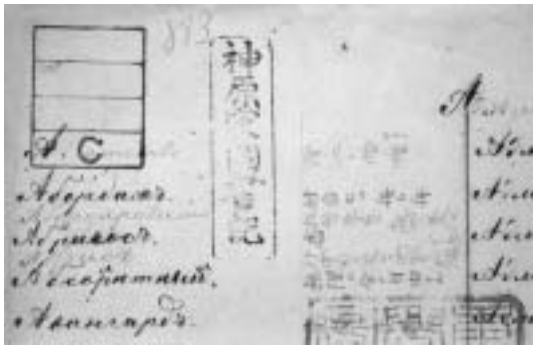
時に明治二十九年六月、正六位勲四等 渡邊至」

此所には、最近香川大学でとりざたされている学習のモチベーション不足など外国語教

育に欠如していると思われる問題の解決へのヒントが鑿められてはいないだろうか。

『ロシア語辞書（仮題）』 [883]

最後に紹介するのは、『神原文庫分類目録』に明治初期と記載されるペン書きによる筆写原稿である。



スラワローリ
「寿路和里」は、和綴じて総頁44頁であるという。

原稿はノートに認められている。250頁を越え掲載語彙は12,000語余語を数える。旧所有者吉田実の蔵書印はあるものの、このノートの製作者が誰なのかは遡及できていない。ノートを補強するために、表裏表紙の内側が、本辞典の製作者の手になると思われる達筆なロシア語の記載された反古紙で、張り付けられている。登録されている語彙をみる限り、元の辞典はかなり質の高いものであったことが窺われる。随所に新しいと思われる増加語彙が薄い濃度のインクで認められている。

このノートによる辞書実現の理由を求めることが出来るとすれば、東京のニコライ神学校で用いていた手書きの露和辞典かもしれない。ニコライの神学校では1875年ごろ「スラワローリ」と称する露和辞書を使っていたようである。手書きの、本邦最初のアルファベット順の辞書である。命名の由来はロシア語で辞典を意味する「スラワローリ」からきている。司祭が余分に作成したのかもしれない。当時は外国語の辞書は相当高価なものであり、ましてロシア語となれば、ロシアの修道院で書き継がれていた編年体の種々の年代記よろしく、修道僧の修行の一環として斯様な手稿辞典が制作されていたのであろうか。何ともミステリアスな辞書ではある。だが疑問も残る。神原文庫に見ることのない写本辞典

